

イデオロギーと詩学はいかに翻訳に影響を及ぼすか

—『日本精神』訳文の語彙を中心に—

孫 若聖

(神戸大学大学院)

Through comparative analysis of two Japanese versions of Relance d'alma japonesa, which was published in Lisbon in 1925 and written by Wenceslau de Moraes, a Portuguese ex-diplomat who had lived in Japan for approximately 30 years, this paper seeks to clarify a fact that the target text in translation is affected by ideology and poetics that are either arbitrary or democratic.

In this paper two Japanese versions of Relance d'alma japonesa are analyzed. One was published in 1935, when the dominant ideology in Japan was imperialism. The other was published in 1969, when the dominant ideology in Japan was democratic. The author draws the conclusion that both of them have been influenced by the dominant ideology in their respective times.

はじめに

ルフェーヴルはその著書 *Translation, Rewriting, and the Manipulation of Literary Fame* において、あらゆる翻訳 (TT) はイデオロギーと詩学 (poetic) による起点テキスト (ST) に対するリライトであると指摘している (Lefevere, 1992: vii)。これを論証すべく、彼はドイツ第三帝国期にナチのイデオロギーに密接していた詩学がドイツの文学システムにおいて支配的な地位を占めていた時代に、シラーをヒトラーの戦友、ゲーテを「ヒトラー・ユーゲント」の味方として宣伝したという、現在からみて特異な例を挙げている。

ルフェーヴルの例証を見る限り、政治における絶対的なイデオロギーと詩学 (ファシズムなど) の下では、文学作品はそうでないイデオロギーと詩学の下におけるものよりリライトされる可能性が高いという錯覚を与えかねない。特に、第二次世界大戦を経験した日本人の読者にとって、同じ ST が翻訳されるとすれば、戦前の TT は戦後の TT よりもリライトされる程度が高いという印象が生まれやすい。

本稿では、ポルトガル人モラエスが書いた『日本精神』の日本語訳文において、イデオロギーと詩学の変化によって、TT の語彙にどのような変化が生じているか、具体例を

SUN Ruo Sheng, "The Role of Ideology and Poetic in the Process of Translation: Focus on the Word in Japanese Version of Relance d'alma Japonesa," *Interpreting and Translation Studies*, No.12, 2012. pages 275-289. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

挙げて、イデオロギー及び詩学がいかに翻訳に影響を与えているか検討していきたい。

なお、本稿はトゥーリー(Toury)が提起した記述的翻訳研究(Descriptive Translation Studies) (Toury, 1995: 23-52)を踏まえたものであり、日本社会でリライトされた、戦前、戦後それぞれの時期のテキストの比較を通じて、目標言語社会のイデオロギーと翻訳の関係を探究する。具体的には、TTにおける語彙を比較する方法を採用した。また、比較対象としては、1935年に出版された第一書房版と、1969年に出版された『モラエス全集』に収録された「日本精神」の訳文を扱うことにする。

1. 問題意識と研究方法

ルフェーヴルは、どのリライトも、意図の如何に関わらず、ある特定のイデオロギーと詩学を反映し、文学作品が特定の社会において特定の機能を果たすように操作していると指摘する(Lefevere, op.cit: vii)。つまり、リライトは権力に基づいた操作である。イデオロギーと詩学について、ルフェーヴルは次のように定義する。まず、イデオロギーとは「私たちの行動を左右する信念、慣習、形式の絡み合ったもの」であるとする。次に、詩学は次の二つの要素からなる。一つは文学装置、ジャンル、モチーフ、プロトタイプ的なキャラクター、状況、シンボルといったもの。もう一つは、社会における文学が果たすべき役割に対する認識である。この二つのうち、後者は詩学の「機能的な要素」であり、明らかにイデオロギーの影響を受けた文学環境で展開される(*ibid.*: 16-27)。詩学が以上のような特徴を持つため、筆者は詩学がイデオロギーの下位システムであり、イデオロギーの支配を受けるものと認識している。ルフェーヴルの定義による「イデオロギーと詩学」の概念は、従来の政治と文学の枠組みにおさまるものではなく、我々の精神、文化生活のあらゆる範囲に影響を与える装置になる。

ルフェーヴルはイデオロギーと詩学が翻訳に影響を与えることを論証すべく、いくつかの事例を取り上げている。たとえば、20世紀前半にはフェミニスト作家が書いた小説は注目されなかったが、フェミニズム運動が盛んになった1970、90年代にはふたたび出版され、脚光を浴びた。または、ギリシア語の「sathes age」(男性の性器)は、TT言語社会における性に対する寛容度によって、別の言い方(鼻、足など)に翻訳されている。

冒頭に挙げたように、1933年から1945年までのドイツ第三帝国期には、ナチのイデオロギーと詩学がドイツの文学システムにおいて、中心的な地位を占めていた。そのため、ユダヤ人のハイネの作品が出版禁止になり、詩集に選ばれた唯一の彼の詩ローライは、作者が匿名扱いとされるようなことが起こっている(Lefevere, 1992: 35)。しかしながら、文学作品は国家社会主義的政治イデオロギーの下では、そうではないイデオロギーの下より、リライトされる程度が高いと断言できるだろうか。

筆者はポルトガル文人モラエスの書いた『日本精神』のSTと複数のTTを対照して読む際、それぞれのTTにおいて、語彙の表現形式が変化していることに気がついた。これらの表現形式の差異は、戦前のファシズムのTTと戦後民主化のTTとの間を境として生じている。戦前の日本は、1894年の「出版法」と1910年の「新聞紙法」の二法を、言論

コントロールの装置として使用し、国家政治、軍事、天皇などに関する内容は、出版物における取り扱いが厳しく規制されていた。戦後、日本国憲法の第 21 条第 1 項及び第 2 項により、出版と言論の自由は保障され、戦前に行われていた検閲制度も廃止された。『日本精神』には日本の国家政治、天皇に触れた内容が多いため、戦前の TT は戦後のよりも、リライトされている程度が高いと思われるであろう。

しかし、戦前の TT と戦後の TT を比較した結果、いずれの時期の TT であっても、語彙の選択を通じて、TT がイデオロギーと詩学によりリライトされるという点が共通しているように思われる。この事実に基づいて、筆者は、イデオロギーと詩学は超階級的なものではなく、むしろ支配階級により確立されるものであり、それゆえ、どのようなイデオロギーであっても、翻訳する際、TT 言語社会において支配的なイデオロギーが、自らの統治方針に適したものに TT をリライトするという点は共通しているはずである。詩学はこのようなリライトの装置と基準である。これを論証するため、本稿では、『日本精神』の日本語訳文の語彙を中心に、政治上のイデオロギーの志向によって、TT における選択された語彙にどのような変化が生じるか、具体例を挙げて検討していきたい。さらに、TT 間の比較を通じて、特定のイデオロギーと詩学は TT において、どのような語彙によって表現されているかという点に研究の重心を置くことにする。

2. モラエスと日本精神

本研究ノートで研究対象とする『日本精神』は、日本に 30 年余りの間滞在したポルトガル人モラエスが書いたものである。以下、まずモラエスと日本の縁について言及しておきたい。

2.1 モラエス及び彼の作品に対する紹介

モラエス(Wenceslau José de Sousa de Moraes) (1854–1929) はリスボンの軍人の家柄であり、1889 年 8 月にはじめて日本を訪れた。その時、彼はポルトガル海軍の士官として、長崎、神戸、横浜の順に、日本の港湾都市を歴訪した。彼は日本に対する第一印象を次のように書いている(花野 1939: 16-17)。

僕はすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界に比類のないこれらの木々の陰で余生を送られたらと思う。でも、シナは日本のようではないのです。シナなら、私はリスボンに帰って……

中国海岸の単調な風景に飽きていたモラエスが日本に魅了されたことは、この言述から読み取ることができる。この後、1899 年から 1913 年まで、彼はポルトガルの駐大阪・神戸領事を勤め、神戸を拠点として外交活動を展開した。任期の間に、彼が残したもっとも大きな業績の一つは、1903 年に大阪で開催された第五回(日本)国内勧業博覧会へのポルトガル商人参加誘致運動である(岡村 2000:165)。モラエスの尽力により、会場

でポルトガル館が単独で設けられ、ブドウ酒、オリーブ油、コルク栓などポルトガルの特産品が陳列された。

1913年、ポルトガル政体の変化、愛した人の死去などの原因と相まって、モラエスは一切の公職を放棄し、徳島での隠棲を選んだ。徳島では、彼はあまり人と接触せずに、日本人妻がなくなってからは、一人で暮らしていた。1929年、75歳の時、彼は徳島にある自宅で亡くなった。

モラエスは少年時代から文学を好み、六、七歳の頃すでに詩を書けるようになっていた。モラエスの日本滞在中、日本は近代化を達成し、日露戦争、日清戦争においては勝利を収め、全世界の注目を集めた。さらに、1908年からブラジルが日本人移民の受け入れを開始したこともあり、その他のポルトガル語圏の国々も日本の事情に一層関心を寄せるようになった。それゆえ、モラエスは仕事の傍ら、文筆活動によってポルトガル語圏の国々に日本を紹介する発信者として、日本に関する以下の12冊の著書を書き上げた。(表1)

表1

著書名(ポルトガル語/日本語)	ポルトガルでの出版年
Traços do Extremo Oriente/極東巡遊記	1895
Dai-Nippon/大日本	1897
Cartas do Japão/日本通信	1904
O culto do chá/茶の湯	1905(但し、神戸で出版)
Paisagens da China e do Japão/シナと日本との風物	1906
A vida japonesa/日本生活	1907
O Bon-Odori em Tokushima/徳島の徳島の盆踊り	1916
O tiro do meio dia/午砲	1919
Ó-Yoné e Ko-Haru/オヨネとコハル	1923
Relance da história do Japão/日本歴史	1924
Os serões no Japão/日本夜話	1926
Relance d'alma japonesa/日本精神	1926

これらの作品によって、モラエスの祖国ポルトガルにおいて彼の文名が高まった。しかしながら、殆どの作品がポルトガルで出版され、人間関係を煩しく思って徳島で隠棲生活を選択したモラエスだが、日本での認知度は他の外国人知日家(小泉八雲など)よりも低いと言わざるを得ない。

2.2 『日本精神』とその日本語訳

『日本精神』(*Relance d'alma japonesa*)は、モラエスが出版社のニーズに応える一方、数十年間にわたる自らの日本人に関する研究の集大成として書いたものである。書名は日本語に直訳すると、「日本魂への一瞥」の方がより適切である。この直訳を用いずに『日本精神』と翻訳された原因は、日本語訳の初版が出版された1935年の頃、ナショナリズムの高まりによって日本精神が強く宣伝されたことが影響したと指摘されている(岡村1991:196-197)。

内容上、『日本精神』は12章と一つの補遺からなり、最初の思いつき、言語、宗教、歴史、家庭生活、種族生活、国家生活、愛、死、芸術と文学、以上の総括、日本精神よどこへ行く、という章の順で書かれ、日本人の人種起源から精神生活の各方面にわたって述べている。のちに有名となる『菊と刀』と同様の、いわゆる日本人論である。

ただ、モラエスは日本で30年余りの生活経験があったにもかかわらず、日本語を読み書きできたわけではない。彼が『日本精神』の執筆に際して、参照したのは英語やフランス語で書かれた「日本に関する書物」であった。他は、すべて彼の見聞によるものだ(佃1969:472)。それゆえに、この本を日本人研究書と見なすことに対する是非については、相当に議論の余地が残されている。例えば、言語学者の服部四郎は、『日本精神』の「言語」という章で現れるモラエスの言語観について、言語学的アプローチからみて正確ではないものの、モラエスの日本人に対する理解への努力は賞賛すべきものという意見を表明した(服部1953:89-90)。また、文学研究者の加納孝代は、『日本精神』は結局、モラエスが驚嘆、共感、理解し得た喜び、或いは最後まで残る自分と日本人の隔たりに対する慨嘆をする場になっていると指摘する(加納1995:76)。筆者の考えるところでは、モラエスはこの本において日本人の各方面を研究してはいるが、旧ポルトガル王家に忠誠を尽くしていたため、天皇政治を賞賛する傾向を示すことになったのだろう。それゆえ、『日本精神』は、単なる中立の立場から日本人を客体化して書かれた研究書であるとは言いにくいであろう。したがって、本論では、『日本精神』は研究書の体裁をとりながら、実質的には文学のジャンルに属するものとして考える。

『日本精神』は1926年に、リスボンのポルトガル—ブラジル社¹(*Imprensa da portugal-blasil*)により、初版200部で出版された(佃 op.cit: 472)。本稿はこのテキストをSTとして使用する。²なお、現在(2012年)までに、『日本精神』は日本で五回の翻訳を重ねられ、モラエスの作品の中ではもっとも多く改訳が行われている。そのうち、1996年に出版された岡村多希子による訳本以前のTTは、すべて花野富蔵によって翻訳されたものである。つまり1935年の第一書房版、1954年の河出新書版、1968年の明治文学全集第49巻版、1969年の定本モラエス全集版である。(実は、1992年、講談社も文庫本の形で『日本精神』を出版したが、この文庫本の底本は1954年の花野訳の河出新書版であるため、本論ではこれを省略することにした。)

このうち、本稿で比較のために用いるTTは、1935年の第一書房版(以下「35年版」と略称)と1969年の定本モラエス全集(以下「69年版」と略称)とする³。理由は、まず、

本論では翻訳に対するイデオロギーの影響に注目するため、それ以外の翻訳に影響を及ぼす変数をできる限りコントロールすることが望ましいからである。35年版と69年版の訳者はいずれも花野である。そのため、訳者の相違によって翻訳に影響が及んでしまう可能性を除外することができる。ルフェーヴルの理論によると、訳者は professionals に属し、イデオロギーと詩学の代弁者を務めるといふ (Lefevere, op.cit: 14-15)。それゆえ、同じ訳者が異なった時期においてSTをリライトする行為から、それぞれの時代のイデオロギーと詩学がいかんにか TT に影響を及ぼしているかが読み取れる。

次に、政治上のイデオロギーと詩学が翻訳にどのような影響を及ぼすかを考える上で、比較対象である TT を取り巻く時代背景に、政治的なイデオロギーに由来する顕著な差異がみられることは重要である。それゆえ、戦前期の絶対化されたイデオロギーの下で出版された 35年版と、戦後、そのイデオロギーが崩壊した後で出版された三つの TT のうち一つを選択して、比較用の TT にする。戦後に出版された三つの TT のうち、69年版は「定本」なので、モラエス作品の TT の中では最も信頼できると思われる。したがって、本論ではこれを使用する。

では、35年版と69年版の時代的な背景と出版する目的にすこし触れてみよう。

1935年、当時徳島県の知識人と官僚はモラエスの事績を広く知らせるため、外務省を動かし、駐日ポルトガル公使にまで働きかけ、盛大な七回忌法要を行った。外務省も「日本主義者」モラエスというイメージを利用し、日本国民の精神統制を強化するために、この事業に巨額の支援を行った。モラエス作品の翻訳出版も七回忌事業の一環であった。それゆえ、35年版は、ナショナリズムの宣伝目標が設定されたモラエスの七回忌法要に応じて出版されたものではないか。

69年版は、『モラエス定本全集』に収録されたものである。『モラエス定本全集』を出版した目的は、モラエスの全貌を日本ではじめて公にすることであった。また、1970年頃の「日本人論」の出版ブームが影響したとも考えられる。佃によると、『日本精神』は、高度経済成長期に入った日本人に、かつての日本人の様子を鏡のように映し出して見せた (佃 op. cit.: 471)。同書に収録された訳者の花野が書いた「モラエス小伝」において、モラエスの日本に対する愛が記録されるとともに、モラエスは軍人であったが戦争を好まなかったという、意図的な強調が見られる (花野 1969: 505)。

なお、比較対象とするテキストの範囲については、『日本精神』の ST が 221 ページからなる大著であるため、本論では紙幅を考慮し、イデオロギーの影響を特にうけていると思われる章のみ取り上げた。すなわち、第三章「宗教」(14 ページ)、第四章「歴史」(10 ページ)、第六章「種族生活」(12 ページ)と第七章「国家生活」(8 ページ)の、合計 44 ページである。

3. 『日本精神』の訳文における語彙の比較

35年版と69年版を比較してみると、政治上のイデオロギーに関する語彙が、次の三つの傾向によって分類することができる 1) 天皇に関する語彙は 35年版で敬語で表示

するものが多いのに対し、69年版では敬語の表現が見られなくなる。2) 日本国民の「没個性」という気質を描写する語彙に対する35年版と69年版での翻訳戦略に大きな変化が見られる。3) 69年版では、35年版で頻出した「日本帝国」という語彙が殆ど見られなくなっている。これらの語彙が69年版で「タブー」視されているようだ。

3.1 天皇崇拝の語彙

天皇崇拝は、日本の絶対主義的イデオロギーの重要な構成要素であった。戦前、天皇は国民への精神統制のための宗教的な装置として利用された。戦後、GHQは天皇自身が自らの神格を否定するよう要求した結果、1946年1月1日、天皇は発布した詔書の後半部において、自らが現人神(あらひとがみ)であることの否定を表明した。今日、天皇は日本の象徴にすぎず、一切の実権を持たない。『日本精神』における天皇崇拝に関する語彙も歴史と歩調を合わせて変化した。戦前の35年版では天皇を「神格化」するために使用された敬語が、戦後の69年版で殆ど消された。例えば、第七章「国家生活」に次の文がある。(括弧内はページ数、以下同様)

例① ST: *Cahindo por seu turno o feudalismo e dando-se a restauração imperial, é então, e só então, que, em rigor, o japonês serve o Estado, a Pátria, pois, antes d'isso, servia o seu daimyô.* (121)

35年版: 封建政治が没落して、天皇政治が復興されたとき、その時ただその時のみ、日本人は国家、故国に断じて奉仕した、なぜなら、それ以前には大名に奉仕してゐたからだ。(125-126)

69年版: 封建政治が崩壊して、天皇政治、明治維新の新政になったときに、はじめて日本人ははっきりと国家、故国に奉仕したといえる。なぜなら、それ以前には、日本人は大名に奉仕していたからである。(57)

STの文脈からみて、「...*dando-se a restauração imperial*,...」の前は「*Cahindo por seu turno o feudalismo*」(封建制度の崩壊に伴い)、後は「*antes d'isso, servia o seu daimyô.*」(それ以前、大名に奉仕した)である。それゆえ、「...*dando-se a restauração imperial*,...」(帝国の再建)は、天皇が再び国家管理の実権を取り戻した日本が、一連の改革を経て、世界中に注目される強豪国の一つになった歴史過程を意味しているであろう。さらに、「明治維新」の公式的な訳語は「*a Restauração de Meiji*」となっていることから、「*restauração imperial*」は、日本国の維新を指している可能性が高い。しかし、35年版でこれを翻訳する際、訳者は天皇が再び国の最高統治者になるという政治的事実だけに注目し、天皇の存在のみ強調している。それにより、日本が近代国家としてこれまでに成長できる根本的な原因は、「天皇政治が復興」したためであるという因果関係を提唱することになった。これは明らかに、戦前の天皇を神格化する詩学の働きであろう。

また、35年版と69年版の間で、語彙の選択に大きな差が生じている一例を挙げよう。

例② ST:O império entrava assim no periodo moderno da sua existência, guiado felizmente pelo espirito esclarecidissimo do soberano, que teve por auxiliares Yamagata, Inoyé, Okuma, Ito e muitos outros,(67)

35年版:帝国は幸運にも天皇の英邁な御精神に導かれて、その近代期にはひつた。

そして、御助力申上げた者は、山県、井上、大隈、伊藤、その他……(70)

69年版:日本は幸福にも、天皇のひどく明快な心に導かれて近代に入ることになったが、それに協力したのは山県、井上、大隈、伊藤など大勢であって……(33)

ポルトガル語には、敬称以外の敬語表現が殆ど存在しないのに比べて、日本語の敬語表現は非常に発達している。それゆえ、ポルトガル語のSTを日本語に翻訳する場合、STで暗示的な、またはニュアンス的な敬語表現は、日本語の明確な敬語表現で表出される場合が少なくないことが想像できる。さらに、どの人物に対して、どのような敬語を使用するかを決定する際に、潜在的なイデオロギーが作用している。上記の例で、STで天皇に対する明示的な敬語が使われていなかったのに対し、35年版では敬語が使用された。

また、「espirito esclarecidissimo」について、「esclarecidissimo」は「esclarecido」の最上級表現で、「非常に明るい」という意味である。「espirito」は通常は「精神」と解釈できる。すると「espirito esclarecidissimo」は「非常に明るい精神」の意味になり、ここで天皇精神のすばらしさに賛意を表す言葉である。35年版でこれを「英邁な御精神」、69年版では「ひどく明快な心」に翻訳された。35年版で「非常に明るい」のかわりに「英邁」を使ったのは、天皇精神の偉大さを誇張したものであろう。69年版の場合、「精神」という言葉が、読者を戦前の軍国主義に関連する日本精神を連想させる可能性があるため、「心」に取り替えられたものと考えられる。「ひどく明快な心」は、むしろ「英邁な御精神」より、意味の面においてもニュアンスの面においてもSTに一致している。

これまでの例を通じて、天皇に対する尊敬語が使用されるか否かは時代によって異なっていることがあきらかになっている。一方、日本の敬語システムには、尊敬語のほか、謙讓語もある。次の例で、35年版では一般の日本国民の立場から天皇に言及する際、国民側のことについて謙讓語が使用され、天皇の高貴さと民衆の低さという二元構造が構築されている。69年版ではこのような傾向はなかった。

例③ ST:Quanto ao soberano, ninguém o via, claramente ; sabia-se que dentro do palácio de Kyôto repousava a sua augusta individualidade ; era, como foi sempre, como é agora, adorado pelo povo inteiro ; mais nada. (64-65)

35年版:天皇陛下の御事は誰れ一人として、はつきり存じあげてあるものがなかつた。

京都の御所にそのやんごとなき御体をやすませておられるとは知つてゐた。昔も

今も全国民に崇められてゐた。それ以上は申上げるも畏れ多い。(67)

69 年版：天皇のことは、誰もはっきり知らなかった。京都の御所深くて厳然とした態度を持していたのは知っていたし、今も昔も変わりなく全国民が崇めていたが、それだけであった。(32)

「via」(ver=みる、知っている)などのポルトガル語の動詞には、敬語が存在しない。ところが、動詞「via」の主体は一般国民、動作の対象は天皇なので、35 年版では、この動詞は謙讓語に翻訳された。一方、「repolisava」(repolisar=休む、休ませる)の動作主は天皇なので、35 年版で「御体をやすませてゐられる」のように尊敬語で表現された。これに対して、69 年版では、天皇に対する尊敬語も、民衆に対して謙讓語も使わなかった。これは ST の言葉使いへの一致を保つと同時に、字面で天皇と普通の日本民衆の人権での平等的関係を強調している。

実は、このようなケースは 35 年版と 69 年版との間で数多くみられている。このような敬語と謙讓語表現の興廃は、イデオロギー及び詩学の変化がもたらした結果であろう。

3.2 日本国民の国民性に関する語彙

ファシズムのイデオロギーと詩学は、日本国民に崇拝される天皇の権威を利用しながら、一般の日本国民が自立して思考する権利と能力を奪うことを目的としていた。その手段として、日本人の個人性を滅却し、彼らに、天皇に対する忠誠を絶対的なものと宣伝していた。無個人性こそが、日本人の特性であり、日本が早期に近代国家となるために不可欠なものと日本国民に信じさせる。このようなイデオロギーが支配する社会コンテクストにおいて、戦前の 35 年版が民衆を洗脳するという目的に合わせて使われることは不可避であった。

戦後、日本では人権意識が飛躍的に高まり、天皇に対する服従よりも、一人ひとりの個人性が重視されるようになった。この詩学の変化は 69 年版の言葉使いでみられる。次の単語「impersonalidade」の二つの日本語訳の例を見てみよう。

例④ ST: Acode ao espirito uma circunstancia importaníssima. A que vem de muito longe e levou a raça a este resultado : o regimen da associação ou da conectividade, ou, por outras palavras, o regimen da impersonalidade individual.

35 年版：...この民族にかうした結果を齎した一つの極めて重大な事情が、その精神を助けてゐる——それは結合または集成の法則、言ひ換へれば、各個人の没個人性の法則だ。(127)

69 年版：...こうした結果をこの民族にもたらしたきわめて重大な事情といったものが、その精神をつくっている。それは協同の結果、言い換えると、それぞれの個人の無人称性の法則である。(58)

例⑤ ST: Uma outra causa vinha juntar-se a esta *reforçando-a*, encaminhando as massas á associação: - era a estranha característica moral da *impersonalidade*. Com efeito, esta gente de Yamato, eliminando quanto possível do drama nacional a *sua própria individualidade*...(117)

35 年版: いま一つの原因がそれに加はり、それ(筆者の注: 日本人の結集)を勢ひづけ、大衆を結合へと導いて往つた——それはある没個人性の不思議な道徳的特徴であつた。つまり、この大和民族はできる限り、自分個人を国民的演劇から除外して...(123)

69 年版: しかし、いま一つの原因がその原因と一緒になつてそれ(筆者の注: 日本人の結集)を煽り、大衆の協同という方向へと導いていく。すなわちそれは無人称性の道徳的特徴であつた。事実、この大和民族は自分自身の無人称性をできるだけ国家的演劇から避けて...(55-56)

この二つの例は、どちらも「impersonalidade=非人格性、《文法》非人称性」が日本国民の団結するにあたっての決定的な要素であると述べている。しかし、「impersonalidade」の日本語訳は、35 年版では「没個人性」となっており、69 年版では「無人称性」になった。39 年版においてみられた「没個人性」は、69 年版ではすべて「無人称性」に取り替えられている。この原因はそれぞれの時代のイデオロギーに基づく詩学に深く関わっているだろう。35 年の天皇と民衆の二元構造において、天皇は「英邁な御精神」を持ち、日本を導き「近代期にはひつた」。これに対し民衆は「没個人性」をもって結合させられ、天皇の下での団結へと誘導された。「没個人性」の宣伝はファシズムのイデオロギーにおいて、民衆を天皇(実際は軍部)に盲従させるための、絶好の装置となった。それゆえ、35 年版で「没個人性」は「*estranha característica moral*」(不思議な道徳的特徴)のような、日本人の個性に対する褒め言葉としてよく使われていた。しかし、戦後の場合、「没個人性」は戦前の日本人の天皇(実際は軍部)に対する盲従を思い出させるので、マイナスの価値をはらむ表現になってしまった。それゆえ「impersonalidade」の翻訳にあたり、花野は理解されにくい「無人称性」という語を使用することになったと思われる。「無人称性」は言語学の専門用語である。また、この語彙であれば、「社会的な意味」(Leech 1983:9-23)の面からみて、プラスのニュアンスもマイナスのニュアンスも連想させる可能性が低い。

また注意を要するのは、例⑤の「*reforçando-a*」(*reforçar*=強化する、励ます)の翻訳である。「*reforçar*」は ST で「impersonalidade」は日本国民の統合を強める、という文脈で使用されている。それゆえこの観点で支持されていた戦前の詩学では、「*reforçar*」は語彙に込められた感情的なニュアンスからみて、プラスのイメージに偏向する「勢ひづけ」に翻訳された。これに対し、「impersonalidade」による日本国民の統合は結局日本を戦争まで引っ張ると認識された戦後の詩学において、69 年版では「*reforçar*」を「煽り」とい

うマイナスのイメージをともなう語彙に翻訳された。ここから「impersonalidade」に対する時代の見方が 35 年と 69 年で大きく変化したことがわかるであろう。

3.3 日本帝国のイデオロギーに関する語彙

天皇を絶対化し、民衆の忠誠と服従が求められた戦前のイデオロギーと詩学と、天皇が相対化され、個人性が尊重される戦後のイデオロギーと詩学のそれぞれが、いかに『日本精神』の訳文に影響を与えてきたかは、これまでの論議で明らかにされた。ところが、日本ファシズムのイデオロギーは、天皇崇拜と帝国主義の一体的推進によって構築されてきたことを忘れてはならない。すると帝国主義のイデオロギーに関する語彙は、戦前と戦後の訳文でどのような変化をみせているのか。

ある語彙による連想は TT 言語社会のコンテクストにおいて、不適合なものだと思われれば、翻訳する際、このような語彙は使用が避けられるべき「タブー語」となる。(Nida & Taber, 1969: 91)。35 年版と 69 年版の比較を通じて、日本帝国のイデオロギーが反映する語彙の殆どは戦後に「タブー語」視され、消されたことがわかった。この中で顕著な例といえるのは、「império」(帝国)の翻訳である。

「império=帝国」は各種の屈折変化を含めると、本論の分析素材では六箇所のみられる。そのうち第 4 章「歴史」に四箇所があり、第 7 章「国家生活」に二箇所ある。表 2 は「império」の 35 版と 69 版の訳文対照である。

表 2

35 年版	69 年版
帝国は全世界から孤立した。(68)	日本は外国人の入国を拒否して、全世界から孤立した。(32)
…、日本帝国を騒がしにやつてきたあの紅毛人に対する大きな不快の念と憎悪の感情を、…(68)	日本を混乱に陥れようとした、あの西洋人に対する大きい不快の念と憎悪の感情…(33)
帝国は幸運にも天皇の英邁な御精神に導かれて、その近代期にはひつた。(70)	日本は幸福にも、天皇のひどく明快な心に導かれて近代にはいることになったが…(33)
危機に直面して動じないこと…海軍の勲功のことなどといった亀鑑は、帝国の近代史上に少くない。(71)	その近代史上において、…(33)
封建政治が没落して、天皇政治(restauração imperial)が復興されたとき、…(125)	天皇政治、明治維新の新政になったときに、…(57)
…帝国内に起こってきた驚ろくべき大発展のことも知つてゐる。(126)	…驚ろくべきこの国の大発展を知っている。(57)

「império」は 35 年版では殆ど「帝国」、「日本帝国」に翻訳された。しかし、「大日本帝国」は 1889 年の大日本帝国憲法発布時から 1947 年の日本国憲法施行時までの約 58 年間、天皇が日本を統治した時代の国号である。この国号で日本はファシズム化され、世界大戦を引き起こしたので、戦後この国号は軍国主義の代名詞と見なされている。そのため、花野は戦後の 69 年版で「império」を翻訳する際、端的に「日本」とするか、「この国」または「その国」といった暗示的な翻訳方略の使用によって、「帝国」という語を文中から抹消した。

「império」のケースは帝国主義に関する語彙の翻訳で代表的な一例である。35 年版では帝国主義の宣伝に加担することになった語彙は、69 年版で修正される傾向がみられる。「império」のケースからわかるように、このような修正は戦後における大日本帝国から平和国の日本への移行というイデオロギーの転換に、テキストを適合させるための詩学の操作である。これはあきらかに、政治上における民主的イデオロギーと詩学は翻訳に影響を与えうる一例であろう。

さらに、このイデオロギーと詩学の転換過程で、敵国であった中国に対する見方も変わってきた。この変化も、35 年版と 69 年版の語彙の用い方の違いからわかっている。

例⑥ ST: Foi o shintôismo que acompanhou os soldados á guerra contra a China, á guerra contra a Rússia, das quaes voltaram victoriosos; (52)

35 年版: 支那との戦争に、露西亜との戦争に兵士らが懐いて往つたのはこの神道だった、そして、いつも勝利を獲た。

69 年版: 日清、日露の戦争に兵士が抱懐していったのはこの神道であったし、それによっていつも勝利を得たのであった。(27)

ポルトガル語の「China」は中国と清王朝の両方を指すので、翻訳する際に訳者に操作可能な余地を与えている。戦前の訳語「支那」と戦後の「日清」のそれぞれが孕んでいる意味の変化は、簡単な時間軸によって説明可能と思われる。(時間順は西洋暦)

1894-1895 年 日清戦争。

1911 年 辛亥革命によって清帝国は崩壊した。この以後、国際社会で中華民国の省略は「中国」(支那)⁴になる。

1925 年 モラエスが『日本精神』を書き上げる。

1931 から 1945 年まで「満州事変」が勃発、日中両国は 15 年に及ぶ戦争に入る。

1935 年 35 年版が出版された。

1969 年 69 年版が出版された。

ST の「guerra contra a China」は、時間順からみて日清戦争のことを指していたに違いないが、35 年版において花野はこれを微妙なイメージを含んでいる「支那との戦争」と翻訳している。なぜなら、1931 年からはすでに日本と中国の戦争が再開しているため、花野は 35 年版で「日清戦争」という固有名詞を用いず、「支那との戦争」という、時代を

設定させない語彙を用いることによって、ST で言及する「*guerra contra a China*」(中国との戦争)が、31 年以後の戦争状態も含んでいるようにさせた。この曖昧な表現手法によって、モラエスの ST の意味が拡大され、31 年以後の日本軍が多く勝利を収めたというような宣伝に使用されたのではないか。

これに対し、69 年版では「*guerra contra a China*」を「日清戦争」という固有名詞に翻訳し、文面において ST の真実な内容を表しているといえる。ところが、花野は 69 年版で、モラエスの中国観を曲解した。なぜかという、彼は『定本モラエス全集』に「日本精神」とともに編入されている、自分が執筆する「モラエス小伝」において、モラエスは「物質の乏しい日本が成長するには平和による貿易がなによりと考えていた」と書いている。これをもって、花野は自ら「それには中国と仲良く手を結ぶことが第一である」ことを提唱していた(花野 op.cit:505)。しかし、モラエスの「日本精神」を含む全作品において、日本が「外国との平和による貿易」、「中国と手を結ぶ」という方向で成長すべきと提唱する記述は見られない。これどころか、モラエスは第 12 章「日本精神よどこへ行く」において、日本人は祖先(モラエスは日本人の祖先をモンゴル人であると想定していた)の足跡にそって、ヨーロッパ、アジアなど世界各地に侵入し、血でヨーロッパを更生させると予言している。モラエスの中国(シナ)に対する見方について、前章で述べたように、彼は初訪日の感想として、日本は「麗しの国...余生を送れたらいい...」、中国は「日本のようではないです。シナなら、私はリスボンに帰って...」というように、中国より日本のほうがよいと言明した。さらに、『極東巡遊記』(*Traços do Extremo Oriente*)をはじめとするモラエスのほかの著書において、中国の風景、民俗、実力に関する描写は殆ど陰惨で、プラスの描写はほぼ一箇所も見つからなかった。このような中国観を持つモラエスは、「物質の乏しい日本が成長するには平和による貿易がなにより」、「中国と手を結ぶことが第一である」ように提唱するはずはないであろう。花野はモラエスの ST を曲解し、世界諸国、とりわけ中国との友好親善の提唱に用いたと思われる。

花野はこのように ST を曲解した原因は、恐らくこの時の政治情勢とも関わりがあるだろう。中国との国交回復は、戦後の日本にとって大きな課題の一つになった。しかし、日本政府は、民間の対中友好の動向や、中国と国交樹立の悲願を抑え、アメリカの歩調に従って中国敵視の政策を施行した。したがって、花野はモラエスの ST を借りて、日中友好を提唱した。これは戦後の平和主義的なイデオロギーと詩学からの影響を受けたといえるだろう。

本章を小括すると、天皇に関する言葉は、35 年版では天皇崇拝という傾向にリライトされたが、69 年版では感情的な傾向が見られなくなった。日本国民の国民性に関する語彙は、35 年版で「没個人性」のように忠実に翻訳されたのに対して、69 年版で訳者は「没個人性」がマイナスのイメージが伴うと考え、文法上の専門用語「無人称性」に取り替えた。筆者は「日本精神」は専門的な文法研究書ではないので、この中で「無人称性」が使用されることは適切とはいえないと考える。

日本帝国のイデオロギーに関わる言葉について、まず「*império*」の場合、35 年版では

これを殆ど「日本帝国」、または「帝国」に翻訳されたが、69年版では花野は「帝国」をTTから抹消した。

次に、35年版では「*guerra contra a China*」が翻訳される際にして、固有名詞の「日清戦争」を用いず、時間上で曖昧な「支那との戦争」を使用した。花野はモラエスの口を借りて31年以後の対中戦争を応援する傾向が見られている。これに対し、69年版で花野はこれを字面通り「日清戦争」に翻訳したが、のちの「モラエス小伝」において、彼はモラエスが日本と世界との貿易を励ました人物というイメージを作り、さらに自分の対中友好の理念も「モラエス小伝」の場を借りて提唱することは、明らかに、戦後のイデオロギーと詩学をモラエスに強要することではないのか。

4. 結論

本研究ノートでは、戦前の35年版と戦後の69年版のTTの比較を通じて、天皇に関する語彙、日本国民の国民性に関する語彙、及び日本帝国のイデオロギーに関する語彙の翻訳では一定の差異がみられることはあきらかになっている。それらの差異は、戦前と戦後のイデオロギーと詩学の変化が反映している。

戦前日本における政治上のイデオロギーの特徴は、天皇統治、国家主義（のちはファシズム主義）、帝国戦争への熱狂、という三点にまとめることができるだろう。これに対し、戦後の日本は自由と民主主義を基調とする、戦争を放棄する平和な国になった。天皇もその地位を象徴へと改めた。そして、国民一人ひとりの基本的人権も守られている⁵。それらの政治上のイデオロギー間の対立は、詩学の面で35年版と69年版での天皇に関する語彙、日本国民の国民性に関する語彙、日本帝国に関する語彙の訳語の選択法を通じて、如実に表出されている。したがって、戦前の絶対的なイデオロギーであれ、戦後日本の民主、自由主義的なイデオロギーであれ、花野の翻訳はTTを自らに適したものにリライトする点で共通している。

さらに、特定の語彙（本論の場合は「*impersonalidade*」及び日本帝国に関する言葉）の翻訳から、戦後の政治上の民主的イデオロギーは、時には戦前より、TTに影響を与える可能性がありうることが示された。

したがって、本研究ノートの冒頭で述べた「絶対的なイデオロギー及び詩学（ファシズムなど）の下では、文学翻訳はそうでないイデオロギー及び詩学の下におけるものよりも、リライトされる程度が高い」という印象は、必ずしも正確だとは限らないことが確認できるだろう。

.....
【著者紹介】孫若聖(Ruo Sheng SUN) 神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了。神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程研究生として在学中。主要な翻訳に町田康『先生との旅』、阿部和重『Geromio』などがある。
.....

【注】

- ¹ この出版社 (Imprensa da portugal—blasil、のち正字法により Imprensa da Portugal—Brasil に書き換える) に関する資料は極めて少ない。リスボンにある小規模の出版社としか確認できない。
- ² 『日本精神』は 1925 年に書かれたが、それより前の 1911 年ポルトガルでは正字法が可決され、一部の綴りを修正した。しかし、モラエスは 1891 年以後ポルトガルに帰国したことはなかったので、作品では式の綴りが多かった。本稿ではこのような綴りを保留し、ポルトガル—ブラジル出版社が出版した原文を使用する。
- ³ 39 年版は歴史的仮名遣、69 年版は現代的仮名遣を使用している。
- ⁴ 「支那」(シナ) その語自体も中国に対する軽蔑称である。
- ⁵ 日本国憲法第二章第 11 条。

【参考文献】

英文

- Leech, G. (1983). *Semantics The Study of Meaning* (Second edition). Penguin Books.
- Lefevere, A. (1992). *Translation, Rewriting, and the Manipulation of Literary Fame*. London/ New York: Routledge.
- Nida, E. A. & Taber, C. R. (1969). *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: Brill NV.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and beyond*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

日本語

- 花野富蔵(1939)『日本文化第四十一冊 日本人モラエス』日本文化協会
- 花野富蔵(1969)「モラエス小伝」『定本モラエス全 V』集英社 pp.484-505.
- 服部四郎(1953)「モラエスの日本語観」『思想』(10), pp.81-90.
- 加納孝代(1995)「モラエス『日本精神』」『国文学 解釈と鑑賞』60(5), pp.75-84.
- 岡村多希子(1991)「戦前におけるモラエス顕彰」『東京外国語大学論集第 42 号』, pp.183-200.
- 岡村多希子(2000)『モラエスの旅 ポルトガル文人外交家の生涯』彩流社.
- 佃忠夫(1969)「解説」『定本モラエス全 V』集英社, pp.471-483.

[作品]

- モラエス(1935)『日本精神』第一書房
- モラエス(1969)「日本精神」『定本モラエス全 V』集英社
- Wenceslau de Moraes (1926). *Relance d'alma japonesa*. Lisboa: Portugal-Brasil.

